

キリシタン時代の異文化宣教

河 崎 靖

序

かつて盲目的ではあれ純粹に神に命を捧げる行為「殉教」が日本でしばしば行われてきた。自らの信仰のために命を捧げるこの行為は、その死が当人の信仰を証すると同時に、人びとの信仰をも呼び起こしてはじめて殉教とみなされるのである。実際には、宗教的迫害によって命を奪われる場合や、棄教を強制されたがこれに応じないで死を選ぶケースなど、さまざまな形態の殉教があるが、キリスト教でいう本来の意味ではギリシア語の *martirya* 「証人」に由来する用語である。キリスト教教会では、殉教者を神と人間を仲介できる存在、すなわち聖人と位置づけて祈りの対象としてきた¹⁾。人間の尊厳と信教の自由を守り抜いた殉教者たちの生涯は時代を超え私たちに勇氣と希望を与えるという考え方に基づいてである。

古代ローマでは、古来の神々への崇拝を重視するローマ帝国の政策に反していたため、皇帝ネロ以来たびたびキリスト教は弾圧された。五賢帝時代のハドリアヌス帝・トラヤヌス帝は帝国の精神的一体性を強めるため古来の信仰の称揚を図り、そのためキリスト教は抑圧され流刑に処される者も少なからず出た。そして、ローマ帝国後期になり皇帝崇拝が強化されると、キリスト教徒への迫害がさらに強まった。古代末期のディオクレティアヌス帝などは皇帝崇拝をさらに強め、キリスト教徒を積極的に弾圧しようとした。キリスト教徒にとって皇帝を神と自ら認めることは実に重大な問題であり、この

時期、初期キリスト教の教皇など多くの高位聖職者たちが殉教したとの伝承がある。当時のキリスト教徒にとって迫害は生涯のうちに何度か必ず直面せざるを得ないことではあったが、自分が信仰告白によって死の危険をどこまで冒すのか、またそれをどこまで他の信者に要求できるのかが深刻な課題であったことは事実である。ともあれこのようにして死に至った人のことを、キリスト教徒は殉教者として信仰の証人とみなしたのであった²⁾。

さて、殉教というのは本来、強い行為である。ただ、信念をもってこの極限の死を受け入れていったのは良心的で弱い普通の人びとであった。彼らの畏れは極めて人間的であって、ちょうど逃れられない死に怯えるイエスの姿に見る弱々しさに類似している。死に臨んでも「神の子である」と断言しながらなお、自分は何者であるのか苦悩するイエスの揺らぎは何と人間的なことであろう³⁾。この点が、2,000年前の情熱的な宗教家イエスへの共感を私たちに呼び起こすのであろう⁴⁾。

1. キリシタンの殉教

日本に目を移せば、残忍な処刑として今なお語り継がれているのが、1619年初め、徳川秀忠が新たに強化したキリシタンの迫害であった。それまで無関心を装っていた京都所司代・板倉勝重もやむなく管轄の信者をほとんど捕らえ牢に入れた。一般の罪人との獄舎生活は過酷さを極めたという。それでも將軍秀忠は牢内になお信者がいることを知るや激怒し、全員の処刑を命じた。一方、この命令に対し信者たちは大いに喜んだという。彼ら



はすべてをキリストに捧げるため熱心に準備をし最後まで立派に証を立てたのであった⁵⁾。こうして同年10月6日、都中を引き回されたキリシタン52名は六条河原で火あぶりの殉教を遂げた⁶⁾。日本では基本的にキリスト教徒であること自体が問題視され、棄教すれば個人の教義により罪とされることはなかった。し



かしながら、キリスト教を棄てることを拒んだ者は例外なく死刑になり、拷問の末に残酷な方法で殺されることになる。こうして、16世紀末から17世紀初めの日本では、外国人宣教師と日本人信者の多くが殉教するに至った。信仰が極刑にまでされるには、キリスト教が植民地化の尖兵として宣教師を派遣しているのではないかという憂慮が当時の支配者たちに浸透していたことに所以する⁷⁾。

宗教上の死生観も大いに関わってこよう。日本においては、死んだらどこへ行くかについて、『日本書紀』に根の国、『古事記』には黄泉の国という表記で表わされる地下の世界があり、イザナギ・イザナミにまつわる話がよく知られている。死後の世界は、昔の日本では黄泉の国と言われて来たとおりであるが、仏教が入ってきてからは、死後の世界のイメージは仏教の教義である極楽と習合していった。併せて、死後の世界がどこにあるかについても、民俗学的な意味で、山中他界説・山上他界説・海上他界説などいくつかの説明がなされることになる。一方、キリスト教やユダヤ教・イスラム教には、人は死んでも永遠に眠るのではなく、いずれ呼び戻されて審判を受け、永遠の生命を与えられる者・地獄へ墜ちる者とに分けられるという復活の思想がある。以下、広義での日本人の心性について、その宗教観を踏まえて一度、考察の対象としたい。

2. 南蛮人が見聞した異文化 — 補陀落渡海を例証として —

井上 靖の小説『補陀落渡海記』（1961年）には、「生きたまま狭く暗い箱に閉じ込められ海に流された後、その小舟に釘付けされた箱を必死の体当たりで壊し脱出するも、翌夕発見され再び潮の中に押し出される」上人（＝金光坊）の話が出ている。このように中世の日本では、南方海上にあるとされる観音菩薩の浄土へ向けて、そこに往生する目的で多くの人びとが船出した。この実践的信仰形態は平安時代から記録に見られ、この渡海は日本人の他界観が反映した行動であり、総じてこの他界観と仏教の観音信仰が結び付いた宗教現象であると言えよう。根井（2002）によると、^{ほ だらく}補陀落寺上人の補陀落渡海は、868年から20件、記録されているが、堺・四国・九州などからの渡海や、氏名不詳の例なども含めると1909年（明治42年）までに計60回に及ぶ。こうした補陀落渡海は日本特有の宗教現象であって、果てしなく遠い海の南方に、常緑の木々や光明と芳香を放つ花々に包まれた世界（補陀落世界）があり、そこには観音菩薩がいる浄土があるとされる。このことを信じ切った人びとは、その浄土に往生したいという願望に駆られ、いわば信仰心に支えられ、小舟を仕立てて大海に身をあずけたのである。補陀落浄土を目指した死への船出である。生きながら黒潮の海に身をゆだねる、一種の宗教的自殺である。海のかなたに常世の国があり、死者はそこに行き、またそこから蘇る。これはいわば日本人の「この国」からの脱出・亡命であり、この意味において、補陀落渡海とは、日本社会にかつて見られた常識を超えた狂躁的な宗教現象であったと言わざるを得ない。

ところで、苦行や捨身を崇高と感じる心理の古層は、仏教の伝来前からあったらしい。奈良・平安時代も入水・焚身などが僧尼令で禁止されるほど相次いだという⁸⁾。時には数人から20余人の同行者を伴い、歓喜のうちに実施された渡海に対し、日本に来ていたキリスト教の宣教師たちは「日本人

を偽の天国に導く悪魔の奸策」という印象をもったという。ただ、歓喜して死に赴くという日本人の信仰ぶりは、「悪魔の奸策」ではないはずのキリシタンの教えの場合にも当てはまる。棄教するよりは、むしろ喜んで殉教する日本人キリシタンの姿はよく知られている。信仰を棄てるよりは早く死に就く方を選ぶという心理は古来、日本人の精神的根底に潜んでいる信心のあり方なのかもしれない。渡海の場合の、海底にあると信じられていた観音菩薩の浄土を目指し、石を背中や手足にくくりつけ我先にと入水していくという心の動きと、例えば「日本二十六聖人」(長崎)の殉教の心持ちに大きな差異は認められないのではなかろうか。キリスト教の神あるいはキリストが住む「パライソ」と、観音が住む「補陀落」とは、殉教者(あるいは渡海者)とその同行者、またそれを見送る人びとにとって、その心情においてはほとんど異なるところはないであろう。観音菩薩の南海浄土もしくは阿弥陀如来の西方浄土でのいわゆる「来世の命」を信じていればこそ、現世での過酷な死に様を恐れなかったという点で、キリスト教の殉教者と渡海者は何ら変わるところはないのである。補陀落渡海に驚嘆したルイス・フロイス⁹⁾がその理由として挙げているのが「異邦人の大部分は来世の命がないと思っている」ことであるが、実際、キリスト教の殉教者と大差ない。もちろん、強制と自発あるいは殉教と往生というコントラストで捉えることもできようが、しかしながら、死に至るまでの信仰心という点では同質であり、命を惜しむことなく信仰に全身全霊を賭けるという態度(不



巡察師ヴァリニャーノ

惜身命)としては、それら(渡海と殉教)は共通した日本的心性と言ってよいものである。

ともあれ、補陀落渡海が日本特有の信仰実践として、宣教師ら外国人には驚愕の念をもって捉えられたのは事実である。彼らの目には、日本人は「悪魔に殉死する」と映った。ポルトガル人ガスパル・ビレラ (Gaspar Vilela) の言によれば、「(阿弥陀信者たちの手本に倣って) 山伏たちは聖者の位階に到達するために小舟で海上に出そこで自分から溺死する」とあり、この記述は、ヴァリニャーノ (Alessandro Valignano、イタリア人) の『日本諸事要録』(1583年)の一章「日本人の宗教と諸宗派」の中の次の描写に相当する「大げさな儀式によって生きたまま海中に身を投じて溺死する者もいるし、また生きたまま地中に埋葬される者もいる」。補陀落渡海についてのさらに詳しい叙述は、グスマン (Luis de Guzman) の『東方伝道史』の「悪魔が奸策を弄して日本人を死に導くことについて」という章の中に見られる: 「船が沖に出た時、首・手足・体の中頃に大きな石を結びつけ、罪の重さで直ぐに地獄に落ちるに十分であるかのように、一人々々海に飛び込んで溺死する。他船に乗って近くに行っていた親戚友人等は、その可哀想な人々の乗っていた船を、それ以降誰もその船に乗る価値のないものとして火をつける。海辺での有様を見ていた人々は、さめざめと泣いて彼等の幸福な運命を羨望する」。この記述に先立ち、「水の下に観音という偶像の極楽」を堅く信じているとあるのであるが、これはすなわち南方海上にあるとされている補陀落世界のことである。概して、日本人は日本に多数の国がある如く、来世にもまた多数の極楽があり、各々の偶像は、祭祀し仕える者を己の極楽に迎えるものと考えている、と受け取られていた。補陀落渡海が最盛期を迎えた16世紀とは、新しい異文化として日本にキリスト教が伝来した時期に当たっており、キリシタンの宣教師たちの残した書簡・報告は誤解と思われる記述が認められるとはいえ、日本側の文献からはうかがいしれない具体的な

描写があり、客観的に補陀落渡海を考える上での重要な記録であることは間違いない。外国人にとって補陀落渡海は日本宗教の希有な現象として、時には野蛮な行為として、時には崇高な行為として、少なからぬ文献に記録されているのである。

3. 日本人の宗教性

— 巡察師ヴァリニャーノとフランシスコ・ザヴィエル —

400年たって、ようやく夢が現実になる。— 現地に立ち入っては当地の風習に従い、かつ理想的には現地の人を後継者として養成する — これは16世紀末イエズス会全権使節、先述のヴァリニャーノ（Valignano、1539-1606年）が掲げた布教方針の根本である。彼はインド・中国そして特に日本での伝道に関してこの適応政策を提唱したのだが、この方向性は4世紀の時を経て第二ヴァチカン公会議によりようやく教会から公式に承認されたのである。ヴァリニャーノが提案した適応政策・漸進主義が何世紀も先んじた正しいヴィジョンであったことがついに立証されたわけである。ヨーロッパ諸国による新しい発見・征服がヨーロッパ人の尊大と優越感をかき立てていた時代にあって、アジアの民族のことは習得するように要請し、彼らの習慣・慣行を身に付けることを指示し、現地のすべての階層と関係をもちながら彼らの礼儀作法を学ぶよう命ずるのは勇気のいることであったはずである。

蓋し、当時、アジアに限らず世界各地への布教の過程にあって、ヴァチカンが時間をかけて論議しなくてはいけない事項が数多くあったような時代である。スペイン・ポルトガルが新大陸へ宣教するに当たって、現地の神父・宣教師が「インディオに洗礼を受けてよいものかどうか」との質問に対しヴァチカンが答えに窮するのは、つまり、現地の人たちをヒトとみなしてよいかどうか結論を出せなかったからである。スペイン人・ポルトガル人が広

大無辺の大洋を航海し、そこで見出した人びとは基本的にみな一様にインディオと呼ばれていた時代、現地の人たちを野蛮人扱いするには、ヨーロッパの古代からの世界観によるところが大きい。すなわち、世界の遙か彼方の地方、最も外縁の地に住む人びとのことをインディオとみなすのであり、スペイン人・ポルトガル人もこうした見方に倣ったわけである。自分たちが新しく発見した国ぐにに住む人たちをインディオとみなしたのであった。

さて、日本へのキリスト教の宣教（1549年～）をはじめ「東洋の使徒」（1748年、列聖は1622年）として、また全世界で活動する宣教師の保護聖人（1927年認定）として知られるフランシスコ・ザヴィエル（Francisco de Xavier, 1506-1552年）にしても¹⁰、日本・日本人のことをよく理解し高く評価していたものの、こと宗教に関しては厳格で、日本での活動時は在来の宗教（仏教・神道）を完全に否定するような形で布教を行った（それでも、日本での滞在期間、2年3ヶ月の間に約1,000人の新しい信徒が誕生した¹¹）。

1551年11月のこと、日本での布教を他のイエズス会士に委ね、ザヴィエルはいったん拠点のゴア（インド）へ向かった。仏教が中国から日本に伝来したことを知った彼は、中国改宗の必要性を感じたからなのである。

ザヴィエルによって開始された日本での布教は、その後、来日した宣教師たちに継承されていく。ザヴィエルは確かにキリシタン隆盛の時代をもたらしたが、まもなく日本で始まるキリシタン大迫害・布教禁止・



ザヴィエル

鎖国という時代の前を生きた人ではあった（中国で1552年没）。おりしもヨーロッパでは宗教改革の嵐が吹き荒れる中、熱心なカトリック修道会であるイエズス会の一員として、遙か東洋の日本への布教に情熱を捧げたザヴィエルであった。当時、彼は日本人のことを「今まで出会った異教徒の中で最も優れた国民」であるとし、優れたキリスト教徒になりうる資質がある人びとであると見ていた。

ところで、西洋・中東の一神教から見れば無宗教（言い方を換えれば宗教の雑種性）ともとれる日本人の宗教性も、日本人にとっては居心地のよい、日本人の感性に叶った宗教観ではある。かつてより外来の仏と土着の神を共存させ、ある意味まことに多神教的な風土の中で、仏教と神道が融合したような修験道などが生まれ出てきたのは自然な流れであった。古来、日本では人は山を神や祖霊が存す世界であると捉え畏れをもって仰ぎ見てきた。そこに聖なるものを感じとり、山に入るとは聖なるものに触れんがためという宗教意識に根ざした行動である。古代よりの伝統のある山岳信仰に神道や仏教・道教・陰陽道等が習合して成立した宗教がいわば日本固有の民族宗教であり、諸宗教が混淆したこの実体を最もよく具現化しているのが「山伏の宗教」たる修験道であろう。大自然の中に分け入り心身を鍛錬し聖なる力（＝験力）を得んとするものであり、原理ではなく自らの身体を通して感覚を磨き上げる実践的な宗教行為であると言える。そして、その修験には、超自然的で超人的な力によって私たちの願い事を叶えんとする「祈りの宗教」のような印象が伴う。

現代にあっても日本人の宗教性は根源的にはシャーマニズム（呪術）にあるのではないだろうか。ではそもそも、神道と結び付く以前の古代日本人の宗教観とは如何なるものであったのか。原始の人びとは、自然物、例えば、巨大なもの、あるいは、恩恵や災いをもたらすものを神聖視し、そこに神が宿るに違いないと感じていたようである。この素朴な純粋な原始宗教的なる

ものは、今もなお日本人の血の中に生きている心情と言えよう。何ごとのおわしますかは知らねども、理屈は抜きにして、かたじけなさに涙こぼるほどの感動を覚えるのである。

注

- 1) 初期キリスト教の殉教者として新約聖書の「使徒行伝」に登場するステファノが最初の殉教者とされる。洗礼者ヨハネの死も殉教とみなされるが、伝統的にはイエス・キリストより前に死んだヨハネではなく、ステファノから殉教が始まったとされる。
- 2) ローマ人は皇帝が神だと信じていたわけではなく、皇帝への服従を形式によって示そうとしたのである。ローマの知識人はキリスト教の教義そのものを軽視していたわけではなく、むしろ迷信に惑わされたものとして同情していた。ただ、国策に公然と反対するキリスト教徒の強情さは罪に値すると考えていたようである。
- 3) 安彦良和『イエス』(2003年、日本放送協会出版)の「あとがき」を参照のこと。

- 4) キリスト教の今日的課題として、例えば進化論と創造説の対立がある。「科学は宗教的信仰を支持することも拒絶することもできない。逆に我々は、天文学・地質学あるいは生物学の権威ある教科書として聖書を解釈すべきではない」という中立的な見解もあり得ようが(アヤラ 2008: 3-4)、とりわけアメリカを中心としてしばしば両者の対立関係が取り沙汰される。

地球上には数千万とも言われる種の生物がいて、それらの種はそれぞれ個性があり、さまざまな形質——形・色・大きさなど——で区別することができる。どうしてこんなに多くの種がこの世に存在するのかというのは昔から生物学者が頭を悩ましてきた大きな課題である(ダーウィン『種の起源』(1859):「互いにこれほどまでに異なり、互いに複雑なかたちで依存し合っている精妙な生きものたちのすべては、われわれの周囲で作用している法則によって造られたものであることを考えると、不思議な感慨を覚える。かくのごとき生命観には荘厳さがある」)。確かに、ダーウィンが提唱した自然選

択による進化論は生命の多様性を解き明かす科学的説明としてやはり今日なお有力な説であり続けている（No one could be a good observer unless he was an active theorizer. 「積極的に理論をうちたてることができる人でなければ優れた観察はできない」）。進化論は、生物の多様性（すべての生物の間の変異性）という自然のあり方を理解するための枠組みを提供してくれている。この生物の多様性というのは、生物の進化による多様性とそれらの生物が相互作用することにより生み出されていると考えられるからである。分子生物学などは、遺伝情報を担う DNA の二重螺旋構造の決定に象徴されるように、すべての生物に共通な生命のしくみを探求することによって科学的立場を確立してきた。このように、現代の科学者は、ダーウィンが夢にも思わなかった方法（例：化石の年代測定）で進化の謎に取り組んでいる（ダーウィンが進化論を発表した当時の社会では、キリスト教の創造論が絶対的であり、進化の概念すら受け入れられない状況であった。まして、神が造り給うた人間がサルのような生物から進化したと公表しようものなら、どんな騒動になるか、すでにダーウィンは予見していた）。

一方、進化論と対立する考え方として、（特にアメリカに多く見られる）創造説がある。この世のすべては神の創造によると信奉する人びとにとって、ヒトの複雑さ（例：眼という器官の機能）などを説明する説として、ダーウィンの進化論は不十分に映る。神という創造主を「知的なデザイナー」とする主張（インテリジェント・デザイン）も創造説の1種である。とりわけアメリカ（1980年代～現代）では、生物がインテリジェント・デザイナーによって創造されたことは生物の複雑さを見れば明らかである動きが起こっている。ただし、「インテリジェント・デザイン」を含めた創造説は今のところ、進化論に対する科学的な代案を提示し得ていない現状ではある。もっとも、進化というプロセスそのものを神が創造した宇宙の特性とみなす考え方もあり得る。

- 5) 2007年6月、この京都の殉教者52名が列福されることがローマ教皇ベネディクト16世によって正式に決定された（列福とは「福者」に列せられること。福者は聖人の前の段階に当たる）。
- 6) 京都市が建都1200年を祝った1994年8月鴨川のほとりに記念碑が建てられた。美しい石碑には「元和キリシタン殉教の地」と刻まれている。なお、記

録（梵舜「日記」息距篇 第四卷 34 頁）には「元和年八月廿九日 ダイウス門徒 七条河原皿にて火あぶり 六十五、六人御成敗也 男女子供以下如此見物 群衆不及是非儀也」とある。

- 7) 宣教師の到来が途絶え、キリスト教徒の活動が表面から消えることで、日本での殉教は少なくなったとは言え完全に絶えたわけではなく、実際、江戸時代を通じて「隠れキリシタン」の発覚と殉教が散発した。
- 8) この心理は、ある意味、特攻隊員の精神に感銘し、大峰先達を敬う現代の私たちにも息づいているかもしれない。
- 9) ポルトガル人のイエズス会士。インドで司祭となり 1563 年来日。滞日中 140 余通の日本通信を本国に送った。『日本史』・『日本覚書』等の書物で名高い。
- 10) 教科書などでおなじみのザヴィエル像は、光輪をつけ、手に神への篤い信仰、神への燃える愛を象徴する心臓をいただき、キリストの磔刑像を見上げている。光輪をつけ「S」の文字を付けていることから、制作期は 1622 年の列聖以降であろうとする見方が一般的である。
- 11) キリシタン宣教師の日本の仏教諸宗派に対する非寛容の態度と姿勢は、16・17 世紀のヨーロッパの時代精神を反映して、他宗教の信教の自由を否定するものであり、日本における一般信徒のキリシタンもまた、この精神を共有するところとなった。近年、キリスト教世界ではカトリック教会を中心として、世界の諸宗教間の対話・共存の努力が続けられているが、異宗教に対するこの非寛容の態度は現在も一般キリスト教信徒層の間に共有して見られるところである。確かにかつてキリスト教は一部特権階級の宗教とみなされることすらあった。また実際、多数の人はキリスト教徒との間に努めて距離をおいてきた感があるし、今なお隔たりをおいて眺めている（五野井 2005: 4-5）。

参考文献

- アコスタ（Acosta, J. de 著、青木康征訳）『世界布教をめざして』（1992、岩波書店）
- アヤラ（Ayala, F.J. 著、藤井清久訳）『キリスト教は進化論と共存できる

- か? — ダーウィンと知的設計』(2008、教文館)
- 五野井隆史『日本キリスト教史』(2005、吉川弘文館)
- 松田毅一・E. ヨリッセン『フロイスの日本覚書』(1983、中央公論社)
- 根井浄『補陀落渡海史』(2002、法蔵館)
- 根井浄『観音浄土に船出した人びと — 熊野と補陀落渡海』(2008、吉川弘文館)
- Schurhammer, G. (1922): „Die Yamabushis. Nach gedruckten und ungedruckten Berichten des 16. und 17. Jahrhunderts,“ *Zeitschrift für Missionswissenschaft und Religionswissenschaft* XII.
- Schurhammer, G. (1945): *Die Reisewege des hl. Franz Xaver und die geographischen Kenntnisse seiner Zeit*. Roma
- ヴォルピ (Volpi, V. 著、原田和夫訳)『巡察師ヴァリニャーノと日本』(2008、一藝社)